

高知大学 病院ニュース

〔編集〕

高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長 大西 三朗

〔発行人〕

高知大学医学部附属病院
病院長 倉本 秋

平成20年度 国立大学法人高知大学 年度計画

附属病院に関する目標を達成するための措置

国立大学は、大学の教育研究に対する国民の要請にこたえるとともに、我が国の高等教育及び学術研究の水準の向上と均衡ある発展を図るとする国の施策を実現するため、文部科学大臣が定める中期目標に基づき中期計画を策定し、業務を実施している。

国立大学法人高知大学の中期目標として、高知大学は南国土佐の自然と風土に学び、未来を展望した知の創造と学術の継承・発展を通して、人類の持続的発展と地域社会へ貢献することを使命として目標を掲げており、その中に附属病院に関する目標を達成するための措置を定めている。これに対する年度毎の実施予定として年度計画を立てているものである。なお、各々の番号はその年度計画の管理番号であり、太字が平成20年度の計画である。

①医療の質の向上に関する具体的方策 (地域のニーズに密着した医療)

- 125) 地域の事情(過疎・高齢化・遠い時間的距離)に即応した医療体制を構築する。
- ・ヘルスシステム運営の再検討委員会を開催し、運営の見直しを行う。
- 126) 救命救急施設が県央部に集中する実状に合わせた救急体制の構築に協力する(軽症急患と高次救急の受入)。
- ・救急システムの稼働調査を開始する。
 - ・CCUネットワークの稼働調査を開始する。
- 127) 医師不足の地域と連携した入退院援助サービスを実施し、入院期間の短縮と、再入院率の減少を図る。
- ・地域の病院、診療所、老人保健施設とのインターネットを利用した連携強化、入退院支援の実施、クリニカルパスの見直し・拡大とインターネット上での公表を行う。
 - ・病棟と外来の連携を継続し、専門看護チームの強化と充実を図る。
- 128) 附属病院内施設のオープン化等によって地域に貢献する。
- ・地域への広報活動を行う。
 - ・他施設からの受入検査を拡充する。
 - ・オープン化の見直しにより充実を図る。
- 129) 外来における術前チェックシステムを導入する(入院期間の短縮、手術リスクの軽減、自己血輸血率の向上)。
- ・術前チェックシステムの対象診療科を外科系全体とし、成果を評価する。
 - ・院外施設の依頼による術前評価を運用する。
 - ・自己血貯血システムを充実させる。
- 130) 午後外来、学生外来を実施する。
- ・全診療科において、学生外来の実施に向けた検討を行う。
- 131) 接遇改善(待ち時間短縮、患者さん用医学図書の実施)を行う。
- ・継続して待ち時間調査を行う。
 - ・全診療科において、予約体系の再編成を実施する。
 - ・医学図書、ガイドビデオ等に関するアンケート調査を行い、さらに充実させる。
- 132) 電子化による医療情報の提供を充実させる。
- ・ネットワークを通じて紹介患者の医療情報を紹介元医療機関に提供できるシステムの試行運用をもとに実運用を行い、対象医療機関を拡大させる。
- (医療学研究・研修センター)(良き医療人の養成・災害医療)
- 133) 医療学研究・研修センターを設立して、更に高度な医学の発展に貢献できる医療を行う。
- ・卒前教育及び初期臨床研修を充実させるため、高知県がん相談支援センターにおいて学生が研修できるカリキュラムを検討するとともに、プライマリーケアについての学生実習、研修医実習を行う。また、地域の医師を対象とした手術手技トレーニングセミナーを行うなど、医師・看護師・薬剤師等のリカレント教育を充実させる。
 - ・院内の各科を対象としたがんに関するカンファレンスを開催し、医療研修の充実を図る。また、「子どものこころ診療部」の充実により、子どもの心のケアを推進する。
- 134) 低侵襲手術等を積極的にを行い、QOL(quality of life)の高い退院後の生活を保障する。
- ・治療後患者長期追跡調査・手術成績解析センター、失禁センター(仮称)を開設する。
- 135) 健康増進事業を自治体と協力して推進し、地域住民の健康増進と医療費の削減を図る(高知コホート計画)。遺伝子診断の健康管理への導入を行い、効率的な健康管理システムを構築する。
- ・生活習慣病(糖尿病、肥満、高血圧、高脂血症等)に関係する遺伝子SNPs解析について、検索と介入を継続する。
 - ・生活習慣病の結果に対する具体的な指導内容のマニュアルを作成する。
 - ・EBMリサーチセンター事業を継続推進する。
 - ・生活習慣病やメタボリックシンドロームの発症に関与する遺伝子を網羅的に検討し、各種リスクファクターがいかなる機序でそれらの遺伝子の発現に影響を及ぼすかを、転写レベルで解析する。
 - ・上記遺伝子の転写に直接ないし間接的に関与する転写因子を同定し、サイトカインや酸化ストレスがそれらの因子を活性化する機序を分子レベルで明らかにする。
- 136) 卒前・卒後教育の一元化を図り、ジェンダー・母性に留意し、プライマリー・ケア、全人的ケアを行える医療人養成を行う。
- ・前年度に引き続きAO入試、学士入学の学生の追跡調査を実施するとともに、本年度から導入した地域枠の妥当性検証、緊急医師確保対策に基づく暫定定員増に伴う新たな入学者選抜を行う。
 - ・一層の地域医療研修の充実を図る。
- 137) 医療職のリカレント教育、生涯学習の場を提供し、地域の医療の質の向上を図る。
- ・医師、看護師、薬剤師及び栄養士に対するリカレント教育を継続実施するとともに、地域における看護師、薬剤師、栄養士に対する勉強会、研修会等への講師の派遣を行う。
- 138) 市民教育(BLS(一次救命措置)、ACLS(二次救命措置)、禁煙指導)やコメディカルスタッフの教育、養成を行う。
- ・小中学校等の教員・児童・生徒を対象に、市民向け心肺蘇生講習会を実施する。併せて喫煙被害や小児事故の予防教育を行う。
 - ・院内医師・看護師に対しICLS(緊急救命処置)講習を行う。また、新人看護師にはBLS(一次救命処置)講習を必修化する。
- 139) 地域連携・貢献グループのアクションプランとして機能し社会への説明責任を全うする。
- ・数町村での健康増進事業の展開を継続し、満足度と効果を検証する。
- 140) 小学生・中学生・高校生に対するメンタルケア・性教育をサポートする。
- ・小学生・中学生・高校生に対するメンタルケア・性教育の効果判定に取り組む。また、前年度に新設した「子どものこころ診療部」における外来診療の充実を図る。
- 141) 微小知能障害児の治療・教育を教育学部と協力して行い、合わせて緩和医療を導入する。
- ・低出生体重児のケアの微小知能障害児発生予防効果の検証を開始する。

- ・緩和ケアチームにおける入院・外来の連携を強化し、診療の充実を図る。
- 142) 南海大震災等を想定し、各自治体、他学部・研究施設と共同し、防災の準備を整える。
 - ・防災訓練を実施する。
 - ・災害発生時には災害支援チームが援助する。
 - ・東南海大地震に対する支援病院として機能できるよう予算措置の方策を含め、次期中期目標・中期計画に向け、病院再開発を検討する。
- (研究成果の診療・社会への反映)
- 143) PETの導入を目指し、特化した先進医療を目指す。
 - ・医療PET、健診PET、癌手術後や虚血性心疾患のフォローアップ検診を行う。合わせて業務を充実させる。
 - ・前年度に導入したFUS(集束超音波手術装置)による自由診療、臨床研究を推進する。
- 144) 研究成果の臨床応用を促進し、専門外来(サブスペシャリティ)の充実を図り、地域における質の高い医療を充実させる。
 - ・開設外来の満足度と有効性調査、介入有効性からみたエビデンス作りを実施する。
- 145) 主要慢性疾患については合同診療体制をとり、EBM(根拠に基づいた医療)に基づく医療と、医療データに基づくエビデンス作りを行う。
 - ・継続して糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症の合同診療を充実させるとともに、集中合同診療の有効性(エビデンス)を検証する。
 - ・主要な疾患の併診データベースから必要な合同診療外来の設置を検討する。
- 146) 先端医療を取り入れた高度・高品質の医療機関として機能する。
 - ・乾癬、膠原病、アトピー性皮膚炎専門外来を中心に、より詳細な診断・病勢評価を行い、効果的な治療を実施する。
 - ・皮膚悪性腫瘍の集学的治療の一環として、新たな化学療法や抗体療法などを取り入れた先進的な治療を行う。
 - ・開発・導入が進んでいる先進機器を用いた診断や治療に取り組む。
 - ・固形癌及び血液悪性腫瘍に対するWT1ペプチド癌ワクチン療法の改善を図り、臨床試験を継続する。いくつかの疾患では、他の薬剤や治療法と組み合わせた疾患特異的なプロトコールを作成し、臨床試験を行う。その他前立腺癌に対するPSAペプチド癌ワクチン療法の開発を継続する。
 - ・先進医療として承認されている骨髄細胞移植による血管再生療法については、さらに症例を重ねていくとともに、長期フォローアップでの臨床経過、また治療効果について解析していく。
 - ・末梢血細胞による血管再生療法についても、より高いリスクの適応症例に対し継続して施行していく。
 - ・輸血部の「輸血・細胞治療部」への発展を目指し、他科・検査部と検討を進めるとともに、下記の計画を進める。
 - ①的確な輸血・細胞治療の実施に最善を尽くし、適正な輸血治療や新たな輸血・細胞治療に関する検討及び啓発を続ける。また「輸血回診」を継続して、輸血副作用の早期発見と的確な対処の指示・啓発を続ける。
 - ②細胞治療の運用の一層の拡充を図るとともに、新たな輸血・細胞治療として、「顆粒球輸血」を顆粒球減少状態の患者における感染症の治療法として導入、発展することを進める。
 - ③輸血部による外来での自己血採取の拡大を進める。
 - ④輸血オーダーリングシステムの改良を目指して、附属医学情報センターとの共同作業を進める。
 - ・脊髄低侵襲手術のための経皮的脊髄障害高位診断法の開発を進める。
 - ・イメージガイド下小侵襲リン酸カルシウムセメント(CPC)注入法の臨床応用を継続し、全国学会で臨床成績を発表するとともに、英文論文の作成準備を進める。
 - ・変形性膝関節症に対する小侵襲治療法の開発として、超音波や感覚神経活動電位を用いた神経凝固疼痛除去法の精度向上の試みを行う。
 - ・転移性骨腫瘍に対する集束超音波を用いた低侵襲性疼痛除去法の臨床応用を進める。
 - ・リアルタイム高精画像伝送システムを利用し、介護支援事業の一環として、黒潮町運動教室参加者の健康相談を行う。さらに生活習慣病の指導への展開を進める。
 - ・PSA(前立腺腫瘍マーカー)を用いた前立腺癌スクリーニングとI125による前立腺癌密封小線源永久刺入治療を継続

- する。また、前年度より病理診断基準の改定で低分化癌には密封小線源永久刺入治療が出来なくなったことから前立腺高分化癌、低分化癌の病理分類の結果で、高分化癌へは密封小線源永久刺入治療を行い、低分化癌へはHigh Dose rate Radiation(HDR)を行い癌治療の実績を判定する。
- ・上記、2法による局所放射線治療成績を解析する。
- ・高知県下において、前立腺がんについての市民公開講座を開催し、講座を受講した患者を対象に追跡アンケート調査を行う。
- ・泌尿器科癌に対するWT1免疫治療法について適応症例があれば追加し、主に副作用と予後(効果)判定を中心に経過観察を行う。
- ・前年度に引き続き、PSA(前立腺腫瘍マーカー)を用いた前立腺癌に対するペプチド癌ワクチン療法の開発を行う。
- 147) 検体搬送システムを臨床応用する。
 - 平成19年度までで事業終了のため、平成20年度は計画なし
- 148) 放射線フィルムレス化、文書電子化で省資源を図り、ISOを取得できる組織体として、環境に配慮した病院を実現する。
 - ・ISO15189の要求事項の詳細を検討し、その水準をISO9001の管理枠に組み込むことにより、実質的なISO15189と同等以上の管理システムとして運用できるように整備する。また、ISO15189認定取得のための準備を進める。
 - ・本年度から開始される特定機能健診の精度保証に関する要求事項を検討し、リファレンスラボとしての能力を持つ精度管理を実施する。
 - ・試薬ロット管理システムを構築し管理を強化する。
 - ・SPECT-CT装置の更新により、核医学の画像とX線CTの画像を重ね合わせた融合画像を取得し、循環器疾患、がん、てんかん、痴呆、各種疾病等の病態を把握して最適な診療・治療に貢献する。
 - ・PACS(画像保存通信システム)により、全面フィルムレス化実現を目指す。

②運営等に関する具体的方策

- 149) 安全な病院管理体制を構築する。
 - ・継続してミステイク防止手段を実践する。
 - ・集中管理データによる栄養サポート、感染制御、創傷管理を継続して行う。
- 150) 職員が安全に、機能的に働ける人員配置と環境整備(セーフティ・マネージメント、福祉施設、人員の外注化と定員化)を行う。
 - ・平成18年度に組織した「院内環境改善ワーキング」の活動を充実させ、職員にとっても、働きやすく清潔な環境整備に努める。
 - ・職員への暴力対策及びハラスメント対策を進める。
 - ・コ・メディカルスタッフの常勤化を推進するとともに、さらに業務の外注化促進を検討する。
- 151) 自己収入を増加させ、機器のレンタル・リース・購入を見直すとともに、固定的経費率を節減し、研究の特許化等で財務の健全化を図る。
 - ・前年度途中から開始した次の業務は、経費節減、効率化が見込まれるので、平成20年度も継続し、更なる経費節減、効率化を図る。
 - ①外部コンサルタントを活用し、医療材料の見直しと良い製品を適正な価格で調達できる体制作りを実施し、経費節減を図る。(医療材料の適正化支援業務)
 - ②手術部におけるオペラマスターの実施(収益・安全性の向上・業務の効率化を目的とし、手術使用材料のセット化、使用材料を把握することにより効率化を図る)
 - ③医事業務の見直しにより、病棟クラークを配置し業務の効率化を図る。
 - ・民間企業との連携、共同研究等の実施に努め、財務の健全化を図る。
- 152) 平均在院日数20日以内、平均病床利用率86%以上、患者紹介率57%以上、経費率35.9%以下を目指す。
 - ・平均在院日数20.5日以内、平均病床利用率85.7%以上、患者紹介率56.0%以上、医療比率34.5%以内を目指す。
- 153) 病院職員を効率的に配置する等により、効率的病院経営を行うために、病院長の裁量権の強化を図る。
 - ・看護師の採用を促進して看護業務にゆとりを持たせる。また、非常勤職員の常勤化を推進することにより、非常勤職員のモチベーション向上を図る。
 - ・医員、大学院生の待遇改善を進め医療スタッフの充実を図るとともに、病棟クラークを充実させて医師等業務の負担軽減を図る。



新任ご挨拶

【生活習慣病の

トータルケアを目指して】

平成20年4月1日より橋本浩三名誉教授の後任として、内分泌代謝・腎臓内科を担当させていただくこととなりました。至らない所が、多々あるかと思いますが、今後とも宜しくお願い申し上げます。私が担当する講座は内分泌、糖尿病、腎臓、リウマチと幅広い診療領域をカバーする診療科です。私自身の専門の腎臓病領域でも、慢性腎臓病という疾患概念が提唱され、疾患人口は成人人口の17%と言われていています。糖尿病、高血圧、メタボリックシンドローム、リウマチを合わせると非常に多くの患者さんの人口が推定されます。これらの疾患は、慢性的な経過となることが多く、服薬だけでなく、食事療法、運動療法、メンタルケアを含めて、総合的な生活習慣病のトータルケアが必要となります。幸い、当科は橋本前教授が育てられた優秀な教室員とスタッフが数多く在席し総合的な診療体制が組める診療環境があります。私は現在の内分泌代謝・腎臓内科の教室

内分泌代謝・腎臓内科科長 **寺田 典生**

員と協力し、また高知県の基幹病院、実地医科の先生方と連携させて頂き、腎臓病を含めた生活習慣病のトータルケアを目指したいと考えております。

また一方で当科は非常に優れた臨床研究、基礎研究の実績がある教室です。私は、優れた医学研究を成し遂げるためには、日常の臨床を大切に、的確な疑問点を見いだすことが、肝要と考えています。今後は現在の教室員と共に、独創的で国際的評価に耐える、腎臓病・生活習慣病の病態解明や新規の治療法開発の研究にも取り組み、高知から世界に発信できる優れた臨床研究、高度先進医療を目指したいと考えております。またもう一つの重要な目標は、臨床教育と卒後研修体制を充実させ、研修医の先生方と学生さんにとって魅力ある教室を作り、多くの若い方に私共の内分泌代謝・腎臓内科に入って頂けるような環境を整え、リサーチマインドを持った信頼される内科医を多く養成することです。着任したばかりで、色々な面で御迷惑をおかけすると思いますが、皆様方の御指導御協力のほど宜しくお願い申し上げます。



新任ご挨拶

「喉頭機能外科による

QOL改善にむけて」

本年4月1日付で耳鼻咽喉科教授として着任いたしました。生まれも育ちも大学も愛媛であり、高知で生活するのは初めてになります。同じ四国内ということもあって知り合いも多く、さほど違和感もなくこちらでの生活にもとけ込んでいます。

一般に耳鼻咽喉科というと、「耳」、「鼻」、そして「頭頸部癌」という印象が強いのと思います。実際に全国の大学教授を見渡してみても、ほとんどの方がそのいずれかを専門としています。そのような中で私は「のど」、特に「嚥下」や「音声」を専門としてきました。これらは耳鼻咽喉科の中ではマイナーな領域ですが、高齢化社会を迎えた現在、脳血管障害や神経・筋疾患などによる嚥下障害や音声障害は医療的にも社会的にも大きな問題となっており、その診療ニーズは急速に高まっています。食べたり話したりすることは人が人らしく生きる上で不可欠な機能であり、私はそれらの障害に対する診断および治療に取り組んできたわけで

耳鼻咽喉科科長 **兵頭 政光**

す。

治療の面からは、嚥下や音声の機能を改善することを目的にした機能改善手術を取り入れてきました。「飲み込みの障害を手術で治す」というのは聞き慣れないかもしれませんが、嚥下の際に必要な運動を手術により代償しようというものです。また、音声障害に対しても声帯の物性や位置を手術により修正することで、改善させることができます。このような手術は手術効果がすぐに得られるため、患者さんも治療効果を直ちに実感することができます。また、嚥下障害や音声障害ではリハビリテーションも極めて重要な治療手段です。看護師、言語聴覚士、栄養士さんなどをはじめとして院内での連携体制を整えて、県下はもとより四国での診療ニーズに応えるべく努力したいと思っています。

もちろん、これまで耳鼻咽喉科として精力的に取り組んできた聴覚障害、めまい、鼻副鼻腔内視鏡手術、閉塞性睡眠障害、頭頸部癌などについても、引き続き取り組んで参ります。耳鼻咽喉科の診療分野は非常に多岐にわたりますが、高度先進医療を担っている大学病院の使命に応えるべく努力いたしますので、皆様には今後ともどうか宜しくお願いいたします。



新任ご挨拶

医療サービス課長 **高橋 貞夫**

4月1日付で医学部・病院事務部の医療サービス課長に就任しました。

昨年、世界遺産に登録され一躍全国にその名が知れ渡った石見(いわみ) 銀山遺跡がある島根県大田市の三瓶山(さんべさん)から瀬戸内海を越えてきました。

出身は岡山県倉敷市で、広島商船高等専門学校、広島大学、独立行政法人国立青少年教育振興機構国立三瓶青少年交流の家を経て、高知大学が4カ所目の勤務地になります。

これまで高専、大学、社会教育施設で培ってきた経験を医事業務に活かして医療サービスの向上に努めてまいりますので、よろしくお願いたします。

職場紹介 整形外科

WHOは2000年、「The Bone and Joint Decade (2000-2010)」の発足を宣言した。四肢・体幹の運動機能を障害する疾病の制圧や医療がQOLと人間の尊厳にとっていかに重要であるかという認識が世界的なうねりとなったものと思われる。日本では「運動器の10年」世界運動と訳され、これを機に「整形外科」という診療科名も、呼吸器内科や循環器内科、消化器外科などに倣って運動器科や運動器外科などに改名しようという議論も起こった。

さて、現在当教室では、各スタッフが以下のような専門分野にもとづいて、診療、研究、教育を担当している。

- (1) 脊椎脊髄外科は、現在、私と谷口講師、武政講師が担当。高齢者の頸椎、腰椎疾患がとくに多く、合併症を抱える高齢者にも行えるように低侵襲手術を開発し行っている。たとえば、頸部脊髄症に対して電気診断による的確な部位診断に基づいて行うピンポイント手術や、骨粗鬆症性椎体骨折に対して小皮切で行うペースト状人工骨充填術である。また2年前から腰椎椎間板ヘルニアに対する内視鏡手術も導入し、いずれも高齢者にやさしい手術をめざしている。
- (2) 関節外科は、川上臨床教授、山中助教、池内助教が担当。高齢者の人工関節手術が最も多く、これも低侵襲化をめざして小皮切あるいは臀筋温存の前方進入股関節手術など、症例を選んで行っている。関節鏡視下靭帯再建術など青壮年期のスポーツ外傷にも対応している。
- (3) 手・末梢神経外科は、野口准教授、谷脇助教が担当。一般的な手・末梢神経手術以外に、乳癌や子宮癌手術後の四肢リンパ浮腫に対して、マイク

ロサージェリーによるリンパ管-細静脈吻合術を行っているのは全国でも数少ない。

- (4) 骨軟部腫瘍は、溝淵臨床教授と川崎助教が担当。良性腫瘍に対しては最新の人工骨(高気孔率ハイドロオキシアパタイト)などを用いて低侵襲手術をめざし、一方、悪性腫瘍に対しては、化学療法および綿密な手術計画のもとに広範切除と再建術を行っている。
- (5) リハビリテーションは石田准教授が専任。高知工科大学と共同で福祉機器や訓練機器の開発を行っている。臨床は、脳性麻痺・片麻痺など痙性麻痺患者の不良肢位に対するブロック療法(ボツリヌス毒素、フェノール、MAB)や関節リウマチなど足の変形と痛みで困っている人のために靴型装具作成に力を入れている。

本県は高齢者比率が全国第3位であり、「高齢者にやさしい整形外科手術」を高知から全国に発信し、地域医療に貢献したいと思っている。

(文責 谷 俊一)



診療状況

区分	外来	入院	
	延患者数	延患者数	稼働率
3月	20,160人 (新来 1,469)	15,443人	82.3%
4月	19,742人 (新来 1,469)	15,040人	82.9%
	院外処方せん 発行率	紹介率 (診療報酬上の紹介率)	
3月	80.84%	63.9% (56.3)	
4月	80.37%	61.0% (54.4)	

編集後記

一介の私度僧であった空海は学僧として唐に渡り、短期間の滞在中に青龍寺の恵果から胎蔵界・金剛界の灌頂を受けた伝説の天才である。その文章力は、遣唐使船が難破し、地方官吏から海賊の嫌疑で上陸を足止めされた折に、大使に代わり福州長官に嘆願書を代筆し、見事に入唐を果たした事で知られる。能筆と共に有名である。斯様に、

往時、文筆は教養・人物の格の証であったようである。

今年4月から脳外科清水教授と私が病院ニュースの編集委員を担当します。二人とも活字として残る文章には多少こだわりがあります。執筆者には非礼を顧ず、注文をつけるとは思いますが、何卒ご協力を宜しくお願いいたします。

(文責 大西三朗)